

人と人をつなぐジュエリー

－ 「大切な人を感じるジュエリー」の探求 －

The Jewellery between Two Close Persons

- Research on the Contemporary Sentimental Jewellery -

■ 杉本 真由子 Mayuko SUGIMOTO

愛知県立芸術大学大学院 柴崎幸次研究室

Aichi University of the Arts

■ キーワード：コンテンポラリージュエリー センチメンタルジュエリー カスタム メイド つながり

はじめに

本研究では、人のつながりを表現するジュエリーの歴史的価値と社会の中での役割の重要性を再検証した。なかでも、センチメンタルジュエリーに着目し、現代の新しい人と人をつなぐジュエリーとして「大切な人を感じるジュエリー」のデザインを模索した。

まず先行研究として、宝飾史を振り返り、主にヨーロッパを中心とする地域を対象に、人のつながりがデザインとして可視化されているジュエリーを選出して分析を行った。また、現代における人と人をつなぐジュエリーの役割を明確にするために「ジュエリーを贈る/贈られる/購入する経験や将来の希望に関するアンケート」を行った。

それらの調査から、センチメンタルジュエリーは、紀元前27年に生まれ、19世紀後半に最盛期を迎えたことが判明した。しかし、第2次世界大戦以降、大量生産、大量消費へと向かったことで変容し、なかでも個人を対象にデザインされるカスタムメイドのセンチメンタルジュエリーは、ほとんど消滅したと言える。現代における大量生産型のセンチメンタルジュエリーでは、人と人をつなぐのに必要な情報、すなわち唯一無二である相手や記念を感じる表現が、人々に求められているにもかかわらず欠乏している。

以上をふまえ、本研究では「人と人のつながりの存在意義や大切さを、ユーザーに改めて認識させることで幸福感をもたらすジュエリー作り」をコンセプトに掲げた。このような強いコンセプトや作家のメッセージを表現するジュエリーは「コンテンポラリージュエリー」に相当し、アプライドアートに位置づけられる。諸説あるが、その始まりは、アーツ&クラフツ運動やアールヌーヴォーであると言われ、ジュエリーのひとつのカテゴリとして存在する。また、古典的なジュエリーにみられる高価な素材やネックレス、リングといったアイテムの狭義にとら

われない特徴を持つ。

以上のことから本研究では、コンテンポラリージュエリーのなかでも、センチメンタルジュエリーに重きを置く「大切な人を感じるジュエリー」を Contemporary Sentimental Jewellery と位置付けた。大切な人の存在を感じられるものを、身に着けたい、傍に置きたい、残したいという強い気持ちに応え、ユーザーに幸福感をもたらすジュエリー[図 1]を目指す。今後、こうしたジュエリーの提案をすることで、現代のセンチメンタルジュエリーをより豊かにしていくことを目標としている。

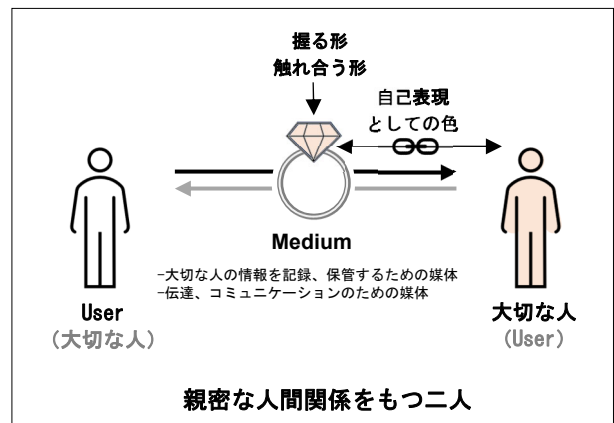


図 1 本研究で制作するジュエリーの立ち位置

1. 「大切な人を感じるジュエリー」の制作に至るまで

2022年度に調査した先行研究から、本研究の背景を述べる。まず、人と人をつなぐジュエリーとして現在市場に出回っているものは、結婚指輪、婚約指輪、恋人同士で交わすものが特に顕著であった。

一方、アンケート結果から、それらの関係に収まらない

様々な関係において、ジュエリーを贈る、贈られる、購入する現状が明らかになった。しかし、買い求められるジュエリーは、多くの場合、その希少性のある貴金属や貴石などの素材、装飾性、ブランドなどの経済価値や、他者からどう見られるかが重視される側面を持っており、ファッションの一部としての役割も強い。また、現代における結婚指輪は、機能性と生産しやすさを重視したデザインで、ある種形式的なカスタムメイドのセオリーを踏むものの、人と人とのオリジナルな体験を生むデザインとは言いがたい。また別の事例として、恋人からもらったジュエリーを別れたら簡単に手放して換金したり、婚約、結婚指輪がしまわれたままとなったり関心が失われているケースも散見された。すなわち、人と人をつなぐジュエリーが元来持っていた、人と人の関係をつなぐという意味の希薄化や価値の変容が進行している。

その反面、重い病気が理由で亡くなった恋人へ、闘病中に願掛けの意味を込めて高額な指輪を購入した経験のある学生や、父の介護を献身的に行う義理の姉への強い感謝の思いをのせたジュエリーの贈与など、強い思いを託すものとしてのジュエリーの存在もアンケートから確認できた。総括的に、購入時には、ユーザーの欲求を満たし、なおかつ記念になるようにといった願望が強くみられた。

以上のことから本研究で制作する「大切な人を感じるジュエリー」に求められる要素をふたつ導き出した[図 2]。ひとつ目は、毛髪や骨、肖像画や写真、絵姿のミニアチュア(2022年度研究報告書参照)といった、歴史上に存在するジュエリー素材に代わる新たな、唯一無二である相手や記念を感じる表現方法である。ふたつ目は、人と人とのオリジナルな体験を生むカスタムメイドである。

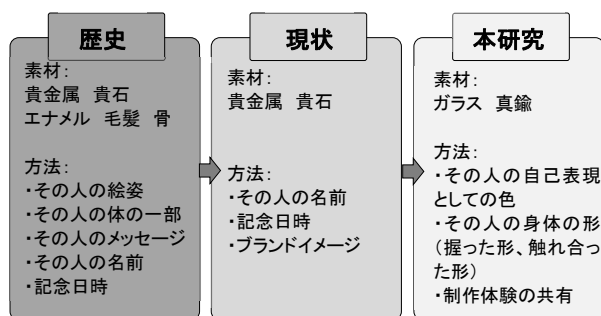


図 2 センチメンタルジュエリーの素材と方法

2. ジュエリー制作の方法

2.1. デザイン画の制作

通常ジュエリーを制作するうえで、はじめに検討すべきことは、デザインテーマ、石などの素材もしくは、モチーフなどデザインの核となるものである。その後、リング、イヤリング、ブレスレット、バングル、ネックレス、ブローチ等のアイテムを決める。リングは指に、イヤリングは耳に、ブレスレットと、バングルは腕に、ネックレスは首に、ブローチは被服に着用できるような形やシステムのデザインを行い、色と素材を決めてデザイン画を制作する。それは、原寸大の完成図であることから、自分の考案したデザインを正確に顧客や、生産者に伝えるためである。デザイン画ができるまでの流れを図 3 のフローにまとめた。制作したデザイン画をもとに、素材に金属を用いる場

合は、彫金、鋳金、鍛金という方法のなかから、そのデザインに合った方法を用いて形にしていく。本研究では、このデザイン画をカタログとして用いる。

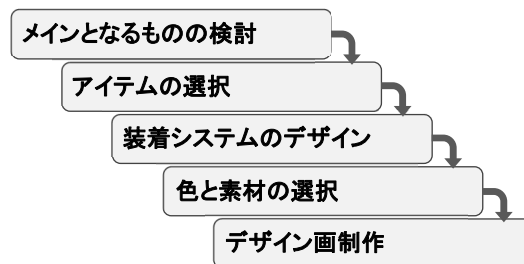


図 3 ジュエリー制作のフロー

2.2. 人の「魂」をジュエリーとして具象化する方法

作品制作のための準備段階として、「大切な人を感じるジュエリー」の検証を行った。制作物がユーザーに大切な人である相手を想起させるかどうかを検証するため、夫婦関係にある被験者を対象に実験を行った。ユーザーが妻、大切な人は夫である。

まずは、夫の身体の一部である2本の指を石膏で具現化した(以下ポジティブピースと呼ぶ)[図 4 左]。立体型取り材「かたとーる」[註 1]を用いて、被験者の右手の人差し指と中指の型を取り、石膏を流し込んで成形したものである。次に手の中に納まる大きさの樹脂粘土を夫に手で握らせその内側の形を具現化した(以下ネガティブピースと呼ぶ)[図 4 右]。ポジティブピースは夫の指の代替物であり、ネガティブピースは夫の握ったという行為の代替物である。

ユーザーである妻にそのふたつを比較させると、ネガティブピースのほうが、強く相手を想起させる結果であった。その理由は、ネガティブピースが他者には何だか分からないという排他性を持つことや、想起された夫が握る行為と、使用時にユーザーが握る行為が重なりロマンティックな感情を生むことが魅力となるからであった。実験を経て、身体を用いた形として、握った形を作品「The Piece of Soul -魂の具象-」に採用することにした。

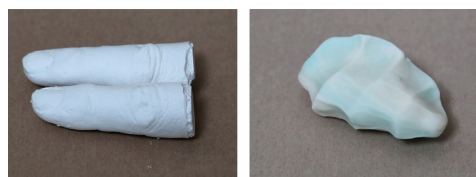


図 4 ポジティブピース(左)とネガティブピース(右)

次に、大切な人の「魂」をジュエリーとして具象化する方法として 2 歳、5 歳の子どもらに陶土を握らせ、素焼きしたものに、呉須で着色した。そこに指紋を思わせるデザインを施し、石灰透明釉薬をかけて本焼きしたものを制作した[図 5]。しかし、大切な人の具象物としてはその具体性に欠けていた。

その欠けている部分を補うため、その「大切な人」に、色による自己表現を行わせることにした。最初の試作に用いたのは、樹脂粘土であるが、幼児や高齢者が扱うには固すぎたため、次に小麦粘土を用いた。白、黒、赤、緑、深緑、黄、青、水色、茶、紫、桃、橙の合計 12 色[図 6]から自己表現としての色を選択させる、もしくはそれを用いて混色、配色を行わ

せた。次に、その粘土を握ることで形にさせた。

通常、自己表現としての色や好きな色は、ファッションやインテリア等自身が選択し、身に着けたり傍に置いたりするものに現れることがある。しかし、そうした色は、それらが持つ役割や他人からの視線等の環境因子、印象操作の強い影響を受けている。

実際に年齢、性別、関係性が異なる 12 名の被験者に、小麦粘土を使い「自己表現としての色」を選択調整させ、握った形を制作してもらったところ、その日に着用している服装や小物に関連する色はおおよそ見られなかった。「大切な人」に対する自己表現の色と、不特定多数の人を相手とするファッション等で表す自己表現としての色は異なるものだと分かった。[図 7]。



図 5 陶土による制作 左:2 歳 右:5 歳



図 6 12 色の小麦粘土

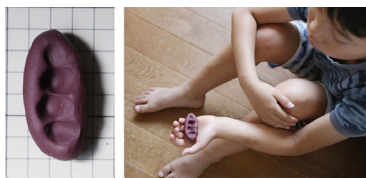


図 7 自己表現の色と握った形の一例

3. 「The Piece of Soul ー魂の具象ー」の制作

作品「The Piece of Soul ー魂の具象ー」は、ユーザーにとっての大切な人の自己表現の色とその握った形[図 7]をベースに制作する。この作品の概念図を図 8 に示した。

小麦粘土は、握るときの固さは適当であるが、乾燥すると粉を吹き縮小する特徴があるため、カスタムメイドの際に制作させる原形の材料にのみ使用することにした。色と形の再現に特化し、唯一無二を表現することが可能である素材であり、ジュエリーの素材として歴史もあるパートドベール技法を用いてプロトタイプ制作を試みることにした。

小麦粘土原形と色がリンクするよう、制作体験時はパートドベール技法を用いて制作したカラーサンプル[図 9]を用いて、カラーコーディネートをを行う。カラーサンプルは、耐熱石膏を使用して、直径 25mm の半球の鋳型を作り、乾燥した鋳型に A スキ/ガラスカレットと KUGLER 社[註 2]が展開するカラーパウダーを調合し、日本電産シンボ株式会社 の NIDEC 陶芸窯 機種 DAM-03D 形を使用して、焼成した。

図 10 は、3DCAD デザインのレンダリングによる作品イメージである。4 人の被験者から取った握った形を原形に、パートドベール技法を用いてプロトタイプを制作したものである。そのうちの一作品の写真を図 11 に示す。母と息子の事例である。

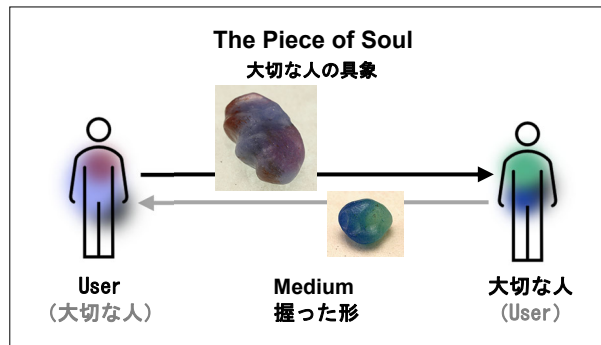


図 8 「The Piece of Soul ー魂の具象ー」の概念図

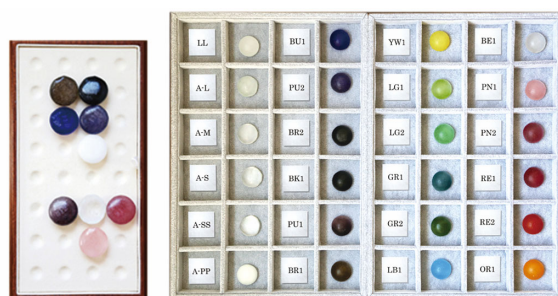


図 9 カラーコーディネートプレートとカラーサンプル

UNICOLOR (1 配色) BICOLOR (2 配色) TRICOLOR (3 配色)



図 10 3DCAD のレンダリングによる作品イメージ



図 11 「The Piece of Soul ー魂の具象ー」
Case: 母ー息子 Size: H54 mm-W34 mm-D25 mm

4. 「The Joint of Souls ーふたつの魂をつなぐ形ー」の制作



図 12 「魂」の形

The Piece of Soul を発展させ、ユーザーとその大切な人のつながりが象徴される「触れ合う形」をベースとした、もうひとつの作品群「The Joint of Souls ーふたつの魂をつなぐ形ー」のプロトタイプ制作を行った。一般的に魂、人魂、ゴーストなどの視覚的

表現や、デザインに用いられる炎が空中を浮遊する形[図 12]をふたりが触れ合う形に組み合わせた。The Piece of Soul と同様、大切な人の自己表現の色を用いたパートドベールのモチーフが中心となるジュエリーである。図 13 は、提案するデザインの中の一つである「恋人つなぎ型」を型取りして成形するリングで、お互いがユーザーとなることも想定している。

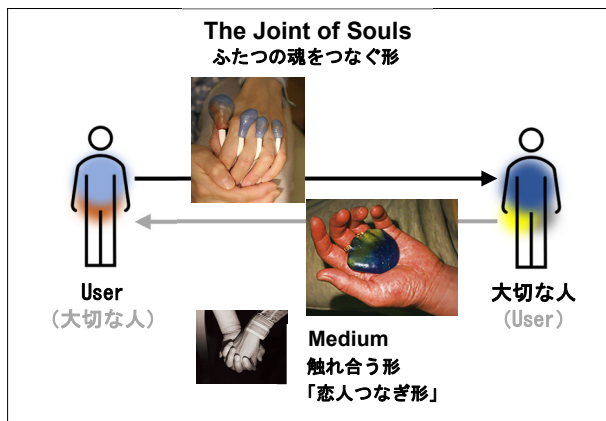


図 13 「The Joint of Souls -ふたつの魂をつなぎ形-」の概念図

まず、様々な関係性や対象者で異なる触れ合う形のサンプルをとることから始めた。図 14 は触れ合う形の型取り現場の様子と、取れた型の形の一部である。そこからインスピレーションを得て、デザイン画を制作した。次にそのコレクションのモックを制作した[図 15]。モックの素材には、樹脂粘土を使い、大きさや形のイメージを固めた。その後に彫塑用粘土を用いて原形を作り、それを用いて耐熱石膏型を作成した。その割型に色配合したガラスカレットを充填し、焼成してできたパートドベールの作品のひとつが図 16 のイヤリングである。父親と息子の触れ合う形「頬を包み込む形」から、イヤリングを制作した。イヤリングには、父親の自己表現としての色を再現し、息子が父親を想起するための Medium という位置づけを目指した[図 17]。

5. プロトタイプ制作のまとめと今後

人と人をつなぎジュエリーを、The Piece of Soul と The Joint of Souls というふたつのシリーズに展開した。それらのプロトタイプ制作を通して、その制作、提案方法の大枠はつかめた。しかし、プロトタイプ制作過程の中で A スキ/ガラスカレットの粒子の粗さの選択、色の配合と焼成後の色の出方の関係、湯口の位置と色の関係、化学反応による黒化反応を美しく見せる方法、割型を制作する最適な方法や、焼成温度のプログラムの差異によるガラス内の気泡の大きさと透明度、磨きや刻印による表皮の触感の違いからくる印象の差など、各過程で様々な課題が残った。今後もひとつひとつの仮説を検証しながら、最善策を模索していく。

また、パートドベールのプロトタイプを用いて、例えば 1 年間など、長期にわたって被験者に保持してもらい、実際どのような効果があるのかを調査実験していく。

本研究の「大切な人を感じるジュエリー」がきっかけとなり、自分にとって一番大切なモノやコトは何なのかということや、社会における人と人のつながりの重要性を、改めて人々に考えてもらえたら幸いである。

手のふれあいによる形成 (型どり)



図 14 触れ合う形の型取り現場

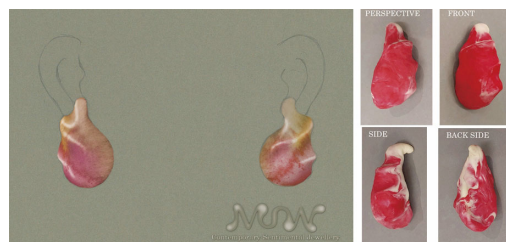


図 15 デザイン画(左)と樹脂によるモック(右)



図 16 パートドベールによるイヤリングのプロトタイプ
Size : H 63mm - W 38mm - D 35mm x 2

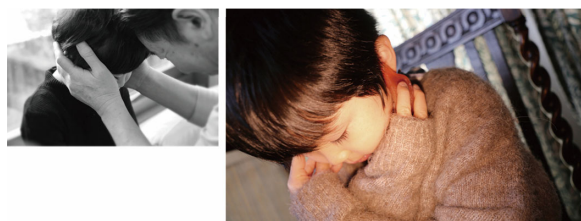


図 17 「The Joint of Souls -ふたつの魂をつなぎ形-」
Case: 息子-父

註

[註 1] 吉野石膏、「かたとーる」(2024/1/8 最終アクセス)

https://yoshino-gypsum-sales.com/dcms_media/other/katatoru2.pdf

[註 2] KUGLER、(2023/12/21 最終アクセス)

<https://kuglercolors.de/en/products/color-charts>

参考文献

・山口遼、『ジュエリーの世界史』、新潮、2016

・秋山真樹子、ニューズレター『REPRE』小特集:「装飾」の再考 寄稿1 コンテンポラリー・ジュエリーと装飾、表彰文化論学会、(<https://www.repre.org/repre/vol39/special/s1/>) (2023/9/17 最終アクセス)

謝辞

本研究を行うにあたり、パートドベール作品の制作に関して、本学の陶磁専攻佐藤文子准教授より、深くご指導いただきました。ここに感謝の意を表します。